

資料4-1 大台ヶ原の植生

大台ヶ原の植生

大台ヶ原の植生は1984年の「大台ヶ原原生林における植生変化の実態と保護管理手法に関する調査報告書」によると、以下のように述べられている。

「気象のデータを用いて吉良(1948)による暖かさの指数を計算すると、海拔1,566m地点での暖かさの指数は46.5度になり、温帯広葉樹林(45~85度)の上限にあたることがわかる。また、気温減率0.6℃/100mを用いて日出ヶ岳山頂における暖かさの指数を試算すると、43.0度となり、亜高山針葉樹林(15~45度)の下限にあたる。同様に調査地点の最低海拔地の中ノ滝下(1,100m)の指数は67.1度となり、大台ヶ原山上域一帯は、日出ヶ岳から正木ヶ原にかけての高海拔地をのぞいてほとんどが温帯広葉樹林地帯に含まれることになる。

現存する植生では東大台の高海拔地にコケモモトウヒクラスのトウヒ林、その下部から広く西大台にかけてブナクラスのブナ林がある。林床にスズタケを伴ったブナ林が西大台を中心にみられるが、海拔約1,450m以上の尾根筋ではミヤコザサの品種であるイトザサを伴うブナ林が分布している。沢すじや湿った凹地にはトチノキ、サワグルミなどからなる溪畔林が小面積ながら見られ、東ノ川上部の岩崖地や痩せ尾根には常緑針葉樹林がみられる。

代償植生は、1870年頃、現在の開拓の地に約300㎡を伐採した跡がオオイタヤメイゲツ等を主とする林として残っており、1917年頃を中心に伐採された跡が中ノ谷、ナゴヤ谷、シオカラ谷をはさんだ両斜面を中心に残されている。中ノ谷とナゴヤ谷の合流点、シオカラ谷の元木谷とヒバリ谷の合流点には集材し製材したとみられる跡があり、正木嶺からシオカラ谷、中ノ谷、セツ池の下をへて日本鼻方面へと等高線ぞいに軌道または架線を架設したとみられる跡が残されている。また東大台の東側の尾根上にはイトザサの草原が散在するが、これも人為的な影響で成ったものである。中ノ谷上流の開放地にはテンニンソウを主とする草原もある。

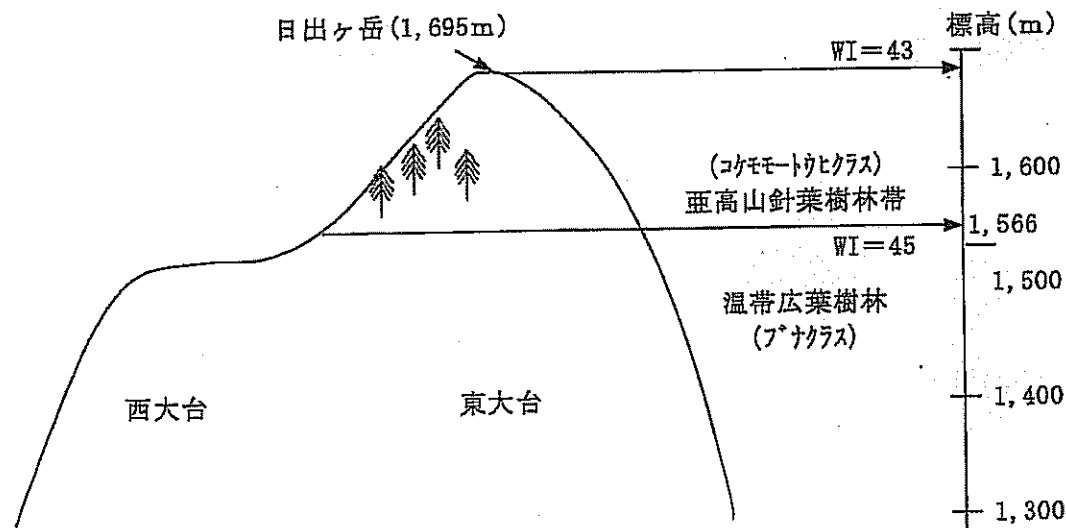


図 大台ヶ原山の植生概況図